



↑小学6年の城山クラブ時代の増田。エースナンバー「1」を背負い、真っ向勝負で戦いを挑む。

右肘骨折からの野球人生 野球少年が抱いた夢の道

夢を打ち砕く大けが

小学1年ごろから、遊びで草野球に熱中していた増田。

「城山クラブ」（藤本健（監督）へ入部して、野球にのめり込んでいった。

「もの心ついたときには野球が好きでした。草野球をしたり、野球中継を見たり。だから、城山クラブでの練習も楽しかった。普通に野球することが楽しかった」と増田は野球の原点を辿る。ただ純粹に野球が好きな少年だった。

そんな少年期の増田には野球人生はおろか、人生そのものを左右する不運な事故の過去があった。

そんな野球少年は突然、思いがけない事故に遭う。

それは小学2年の夏だった。

近所でいつものように友達と遊んでいたときに、転倒して右肘骨折の大けがをする。すぐに病院へと直行し、手術を受けた。

術後、「けがの後遺症が残るかもしれない。骨折箇所の神経を圧迫すれば、最悪ボールを投げられなくなる可能性もあります」という悲痛な言葉が医者から告げられた。

そして、夏休みのほとんどを病院のベッドの上で過ごした。退院後は、辛いリハビリの毎日が半年間続き、完治するまでには一年の歳月を要した。しかし、大けがから数か月後、父豊さんの目にある光景が飛び込んできた。自宅前の壁にボールを投げて遊ぶ息子の姿だった。

この時、「息子は本当に野球が好きなんだ。野球しかない」と、改めて気づかされたと豊さんは話す。

けがへの不安も当然あった。しかし、息子のやりたいことに親としてできる限り協力しようと城山クラブ入りを決断した。

ここから親子二人三脚の野球人生がスタートする。

はじめりは連続15四球

城山クラブで野球を始めた増田は、二塁手や右翼手を任されていたが、投手へ転向するのは小学5年からだった。

当時の増田を知る、城山の藤本監督は、「投球フォームが良く肩も強かった。だが、最初から球が速くて、制球力が良かったわけではなかった」と意外な過去を明かす。

そんな増田を物語る一つのエピソードがある。練習試合で1イニング15四球の苦い経験だった。本来なら、投手交代のところが藤本監督はあえて増田に投げさせた。

これから、城山クラブのエースとしてチームを牽引する増田に、野球の厳しさを教えたかったからといえる。つまり一人の選手として、そこからの成長を期待した現われでもあった。

「15四球はきつかった。でもそこから練習も自主的に取り組み、練習後も残って走り込みをしました」と増田は野球人生の分岐点を振り返る。



努力に勝る者なし 人としての高みを

城山クラブ時代の監督
藤本 健二さん
（辺田見・58歳）

増田は8年前、野球選手の生命線ともいえる肘にけがを抱え城山クラブへ入りました。そこで気をつけた点は、投球フォームの指導でした。すると故障もなく、小学6年の夏ごろから、球威と制球が飛躍的に伸びました。城山クラブ時代は、あいさつや礼儀ができる選手指導、人に感謝すること、物を大

事にすることを学ばせました。増田は練習態度も真面目で努力の選手でした。目に見えない努力があったからこそ、今大会のような結果がついてきたのだと考えます。これから先も、故障に気をつけて野球を続けてほしいと思います。野球人として大きく、そして人間としてもっと大きく成長してほしいですね。

野球は恋人。



八代東高校3年

増田優貴

Masuda yuki
10

Profile

ますだ・ゆうき
18歳。身長179^{センチ}、体重68^{キログラム}。
小学4年生で城山クラブ入部。中学時代はリトルシニアリーグなど所属。高校は野球の強豪・八代東高校へ進学。1年秋からレギュラーに定着。NHK杯優勝をはじめ、今夏全国高校野球県大会で準優勝の原動力となる。投手。右投左打。ストレート 130^{キロメートル}台後半。変化球4種類。

夢の甲子園あと一歩

高校球児にとって、夏の終りを告げるサイレンが球場に鳴り響く――

そこには人目をばからず、仲間と大粒の涙を流す増田優貴投手の姿があった。

「甲子園出場は幼いころからの夢でした。近いようで遠い存在でした」と増田は唇を噛みしめながら、8年間の野球人生を振り返る。

今大会、八代東はノーシードから怒涛の快進撃で熊本県大会を勝ち進んだ。4回戦で文徳（熊本市）に5対2、準々決勝で必由館（同）に3対1と、いずれも強豪校を破った。ついには準決勝で、昨夏の王者熊本工業（同）に7対0で快勝し、決勝の大舞台まで勝ち上がった。

その快進撃を支えた一人こ

そ、紛れもなく増田だった。準決勝までの45イニング中、23イニングで先発や中継ぎを任された。自責点はわずかに3点。抜群の安定感、そしてチームからの信頼を一身に背負っていた。

しかし、九州学院（同）との決勝戦。先発を任せられるも、4回6失点で降板。八代東が誇る自慢の打線も沈黙し、結果3対7で甲子園出場を逃す。無情にも野球の神様は、増田に微笑むことはなかった。

「あと一つで甲子園。硬さから自分本来のピッチングができませんでした」と増田は重い口調で話した。

ただ野球が好きだった

増田が本格的に野球をはじめたのは小学4年のころ。御船町で唯一の少年野球チーム

7月26日、第92回全国高等学校野球選手権熊本大会決勝。藤崎台県営野球場のマウンドに立っていたのは本町出身で八代東高校3年の増田優貴投手（滝川）だった。彼には幼いころから、追求めた夢があった。それは、高校球児憧れの聖地「甲子園」。

そんな夢を追求めた、一人の高校球児にスポットをあてここまでの道のりと野球人生をリポートする。